

結論：軟骨組織が微細で幼弱な段階で滑膜から上関節腔に放出し、関節腔内でそれぞれが成熟し、米粒大へとなる機序が示唆された。

演題4. 平成20年度岩手県国民健康保険診療施設歯科診療所研修の研修歯科医と受入れ施設に対するアンケート調査

○工藤 義之, 岸 光男, 熊谷 啓二,
千田弥栄子, 柳谷 隆仁, 岡田 伸男,
星野 正行, 古川 良俊, 浅野 明子,
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
総合歯科教育学分野

目的：歯科訪問診療、歯科保健活動を含む地域医療およびへき地における歯科医療を研修歯科医が経験することを目的に、平成18年度から岩手医科大学附属病院歯科医師臨床研修プログラムでは岩手県内の国民健康保険診療施設歯科診療所において3日間の研修を3年間実施した。平成18年度研修終了後に受入れ施設を対象としたアンケート調査を実施し研修の改善を図った。本研究の目的は改善後の研修の評価、分析と改善点を抽出することである。

対象と方法：平成20年度本研修に参加した研修歯科医33名と研修を受入れた9施設の両者を対象としたアンケート調査を実施した。

結果と考察：回収率は研修歯科医85%、受入れ施設100%であった。本研修を通じて79%の研修歯科医が歯科訪問診療、歯科保健活動を含むへき地における地域医療歯科医療を経験することができた。研修日程によっては歯科訪問診療、歯科保健活動を経験できなかったため受入れ施設の予定を把握した上で研修日程を策定する必要があると考えられた。本研修に懸かる宿泊で研修歯科医の費用負担に差があったことから早急に是正する必要があると考えられた。研修歯科医が本研修を経験することについて93%の研修歯科医が有用であると考え、すべての受入れ施設が有意義であると考えていた。本研修を通じて研修歯科医が経験したことは、本院や協力型施設では経験することが困難であることから、本研修を継続する意義があると考えられた。

結論：本研修は本院歯科医師臨床研修プログラムの目標達成に必要な研修である。

演題5. 歯科医師卒後臨床研修初期における医療面接研修の意義

○千田弥栄子, 岸 光男, 熊谷 啓二,
柳谷 隆仁, 浅野 明子, 坂本 望,
星野 正行, 瀬川 清, 工藤 義之,
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
総合歯科教育学分野

目的：現在、岩手医科大学歯科医師臨床研修プログラムでは研修初期に、専門の教育を受けた模擬患者(SP)と対峙する医療面接研修を実施している。我々は、研修評価の分析と研修歯科医に対するアンケート調査を行い、本研修の意義を検討した。

方法：平成21年度に医療面接研修を行った臨床研修歯科医30名を対象とした。研修では、A「歯周治療と義歯作製過程の説明」、B「麻酔抜髄法の説明」、C「入院の必要性の説明」の3課題を行った。研修歯科医の医療面接はSPと指導歯科医が同じ項目について評価した。研修後に15項目のアンケート調査を実施し、結果の主成分分析後、抽出された成分得点の課題別平均値を一元配置分散分析に供した。

結果：抽出された3つの主成分で全固有値の66.8%が説明された。成分1は「専門のSPに面接したことの意義」に関する成分と推測された。また成分1の因子得点平均値に課題間で差が認められ、C課題を実施した者で有意に高かった。成分2は「研修内容への理解」、成分3は「研修プログラムとしての医療面接研修への評価」を表す成分と考えられた。また、課題CにおいてSPは研修歯科医の面接を他の課題よりも低く評価していたのに対し、指導歯科医の評価は高かった。

考察：高難度の課題において専門的SPと面接した場合に、研修歯科医は本研修に意義を感じているものと考えられた。課題CでSPと指導歯科医の評価に差が生じたことは、指導歯科医が課題の難易度を考慮したことによると思われる。困難な課題に対してもある程度の水準を求

めるといった卒前教育との差別化が、指導歯科医になされていない可能性が示唆された。

結論：専門のSPと高難度の課題の組合せを体験した研修歯科医が本研修を高く評価しており、本研修の意義は高いと考えられた。さらに医療面接の卒前教育と卒後臨床研修との差別化のために、課題の見直しと指導歯科医の意識の変化が必要である。

演題6. 予防歯科総合講義プレ・ポストテストにおける識別指数と正答率との関連

○岸 光男, 相澤 文恵 阿部 晶子,
南 健太郎, 杉浦 剛, 杉山 芳樹*,
米満 正美

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座
口腔保健学分野*,
同口腔外科学講座 歯科口腔外科学分野

目的：学内で行う試験における識別指数の意義を検討することを目的とした。

方法：本学6年生を対象とした10回の予防歯科学総合講義で行ったプレ・ポストテスト結果を分析対象とした。プレテストは講義前に実施し、直ちに回収した。講義終了後に同じ試験問題を配布し、ポストテストを行った。全てのプレ・ポストテストを受験した者66名の結果について以下の指標を算出した。

個人正答率：個人の正答数／総問題数

識別指数：総合成績上位1/4における問題別正答率－下位1/4における問題別正答率

結果：個人正答率は講義前の平均値 0.635 ± 0.089 に対して講義後に 0.862 ± 0.071 から有意に上昇した ($p < 0.001$, 対応のある t 検定)。全165問の識別指数はプレテストが 0.221 ± 0.197 とポストテストの 0.159 ± 0.151 よりも有意に高い平均値を呈した。しかし、識別指数マイナスとなった問題数はプレテスト16問に対し、ポストテスト3問で、ポストテストで有意に少ない割合であった。識別指数と正答率の関連を Pearson の相関係数で分析したところ、プレテストでは $r = -0.029$ で有意な相関は見られなかったが、ポストテストでは $r = -0.683$ と、正答率が低いほど識別指数が高い関係が認められた。

考察：識別指数は下位1/4が極めて低い正答率

の場合に高くなることから、集団のレベルがボトムアップすると、同一問題の識別指数は低下する。レベルが近接した集団のさらに細かい識別のためには正答率の低い難問が適するが、知識の与え方や設問が不適切な場合には正答率が低くとも、識別指数は高くない場合もある。結論：識別指数は受験者集団の知識レベルによって変化するため、介入可能な集団に対して行った試験問題の識別指数は、問題の良否もさることながら集団への介入のあり方で大きく左右されることが考えられた。